
リリちゃForce vivid

神尾そら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリちやForce vivid

【Nコード】

N1335S

【作者名】

神尾そら

【あらすじ】

・・・この世界に管理局の白い悪魔なのはさんは居ない。

されどその不屈の魂を受け継ぐ者達は現れる。

（前書き）

・「とらいあんぐるハート」のあらすじ
高町なのは（なのちゃん）は謎災害・ヒドゥンと戦って魔力を失った。

なので実家の喫茶「翠屋」を継いだ。
その後クロノと結婚した。

・「リリチャStrikers」のあらすじ
なのちゃんさん（19）はクロノとの間にアリサ（元幽霊）を儲けた。

その後、スバルとヴィヴィオが義理の姉妹のような仲になっていた。
それから4年後。黒い歴史は再び動きだす。

この世界の人々は時空を犯す災害・ヒドウンと戦っている。
もう何百年、何千年と戦って来たのか。
いやそれすらも記憶に残っていない。
ベルカは喰われた。そして今も地球とミッドチルダを喰おうとする。

されど魔法少女は現れる。

16年前、地球とミッドチルダを襲った未曾有のヒドウン。
その脅威に対してたった二人で立ち向かった少年と少女が居た。
少年の名はクロノ・ハラオウン。
少女の名は高町なのは。
その災害において高町なのはは『わがまま』を突き通す事によって大切な人々を守り抜いた。
その代償として魔法を失ったとしても。

結論から言おう。

……この世界に管理局の白い悪魔^{なのはやん}は居ない。

されどその不屈の魂を受け継ぐ者達は現れる。

——スバル・ナカジマ（21）
魔法の呪文を受け継ぐ”女”
だがもう”少女”ではない。

「風は空に、星は天に……輝く光はこの腕に！ 不屈の心はこの胸に！」

色を失った世界でスバルは巨大な怪物と対峙する。
それこそ時空を食らうヒドウンだ。

「一撃イ必倒オ！ デイバインバスター！」

その魔法をスバルは誰に教えられたわけではない。

——この世界に白い悪魔^{なのはさん}は居ない。

ただそこに在っただけだ。

だがその魔法を持つてしてもヒドウンは倒しきれない。
ヒドウンが伸ばしてきた腕によってスバルは弾き飛ばされる。

「がっ！」

スバルの戦う様子を見ている少年と少女がいた。

「スウちゃん！」

——トーマ・アヴェニール（15）

スバルをスウちゃんと呼ぶ魔法少年。
義理の妹を持つ事を除けば平凡なただの少年。

『仕方ありません。あの人だけでは荷が重すぎました』

——リリイ・シュトロゼック（年齢不詳）

シュトロゼックの娘。

その力はエントロピーの法則すら打ち破る。

「諦めたらそれまでです。でも貴方なら運命を変えられる」

リリィはトーマに囁き続ける。

だがスバルはトーマに向けて叫び続ける。

「トーマ……誓約しちゃダメエエエエエエエエエエエエエエエエ！」

スバルの叫びはトーマには届かない。

『避けようのない滅びも、嘆きも、すべて貴方が覆せばいい。そのための力が貴方には備わっているんだから』

「騙されないで！ そいつの思うつぽよ！」

スバルの叫びはトーマには届かない。

「本当……なのかな？ 僕にこんなふざけた結末を変える力があるのか？」

トーマはちらつかされた力に手を伸ばす。

ヒドゥンと戦う力。

それはトーマス一人では無理だが、リリイとなら……。

『もちろんです。だから私と誓約して下さい。黒騎士になってよ!』

「だめえええええええええええええええええええええつ！」

満面の笑みを浮かべるリリィ。

絶叫しながら落下するスバル。
そしてトーマは、

「はっ！ 夢オチ……？」

以上ここまで夢オチ。

~~~~~

リリちゃForce

~~~~~

そして現実。

「トーマおにいちゃん。くおら起きろお。一閃必中！ デイバインバスター（物理）」

「げふっ！」

布団もろとも殴り飛ばされるトーマ。

その義理の妹をトーマは思い切り怒鳴りつける。

「何するんだ、ヴィヴィオ！」

——ヴィヴィオ・ハラオウン（11）

なのはとクロノの義理の娘。そして事実上トーマの義理の妹。
今は名すら喰われたとある王国の聖王。

「げふっ！ 3話で死ぬぞ！ そんな（物理）とかやってると3話で首食われて死ぬぞ！ 10話あたりで復活したと思ったら発狂して視聴者から豆腐メンタル扱いされるぞ！」

「二度寝の妨害をする義妹が邪魔者ってわけ？ エロゲ主人公の発想ね」

「エロゲじゃねえ！ ちょっ、やめっ！ 大人モードは止める！ おっぱい当たる！」

「当ててるんです」

「そのなんつーが見られたら誤解される！」

だが義理の兄妹のほほえましい（？）やり取りを見守る一人の少女が居た。

「……何やってるんですか、トーマさん」

——アインハルト・ストラトス（15）
ヴィヴィオの通う高校の先輩。元通り魔。
トーマとヴィヴィオを起こしに来たら出くわす。

「……違っんだ。アインハルト……僕は何も悪くないんだ」

「きゃー、アインハルトさん。獣になったトーマ兄ちゃんに襲われるー」

「アインハルト、その霸王流のポーズはなんなんでしょうかねえ」

「霸王断空拳！」

「ぐおあっ！」

こんなハーレムラブコメみてーな日常だが、まあなんの因果かトーマ・アヴェニールはスバルによってハラウン家に預けられたのである。

「どう、アインハルトちゃん。ヴィヴィオちゃんとトーマくん起きた？」

「はい、なのはさん。トーマさんの方は二度と目が覚めないくらいまで叩きのめしてやりました」

——なのは・ハラウン（25）

父親が死んだ世界で魔法少女としてヒドウンと戦い、その魔法を失った元魔法少女。

クロノ・ハラウンの嫁、トーマとヴィヴィオにして義母。

~~~~~

リリちゃ Vivid

~~~~~

— S t r i k e r s

— V i v i d

— F o r c e

——心の三角形（ハート）が交差する時、物語は始まる

「あつははっ。それでまたボコられたの？」

——アイシス・イーグレット（15）

トーマとアインハルトの同級生の少女。
爆弾魔。

「いつもの事だが容赦ないんだよ、あの通り魔……」

「義理の妹を襲うトーマさんが悪いのです」

「それでも僕はやってない……！」

「えー、だってトーマ兄ちゃんおっぱいぶるゝんぶるんって言うって
たじゃん」

「言ってねえよ捏造すんな！」

何の因果か、こんな世界なのである。
リリちゃ S t r i k e r s は終わらない。
物語は、まだ続く。

~~~~~

「なのはさん」

「え、何……スバル？」

いつになく雰囲気がい暗いスバル。

なのはもスバルの事は子供の頃から妹のように扱ってきた。

しかし最近ヒドウンとの戦いに明け暮れるスバルはどんどん擦り切れている。

それが関係あるのだろうか。

「あなたは自分の人生が尊いと思う？ 家族や友達を、大切にしている？」

「え、えつと……わ、私は大切……だよ？ 家族も、友達の間みんなも。大好きで、とっても大事な人たちだよ！」

「本当に？」

「本当だよ？ 嘘なわけないよ」

「そう。もしそれが本当なら、今とは違う自分になるうたなんて、絶対に思わないことね……さもないければ、すべてを失うことになる……」

「スバル……？」

「貴女はなのは・ハラオウンのままで居ればいい。今まで通り、これからも……」

何故なら、このなのははなのちゃんだから戦う事は無いのだ。

~~~~~

されど救済を求める人となのはは関わってしまう。

『助けて………』

なのははもう魔力を持たない。

9歳の頃にヒドウンとの戦いで失ってしまったからだ。
だがテレパシーは聞こえる。

「だれ………？」

なのはは呼ばれる声の元へ向かって行く。
そこに居たのは翠色の長い髪の少女。

『私はリリイ・シュトロゼック………助けて………』

そのリリイと名乗る少女は追われていた。
傷だらけだった。

そしてリリイを追う人物をなのははよく知っていた。

「スバル………？」

何故スバルが弱者に見えるリリイを追い詰めるような事をしているのか、なのはには分からない。

しかしスバルは確かな瞳でにらみ返す。

「……なのはさん。シュトロゼックから……その子から離れて……」

「なんで……この子ケガしてる……」

「あなたには関係ない」

「だってこの子、私を呼んでた！ 助けてって！」

「そう……」

戸惑うなのは。

冷徹に見下ろすスバル。

この時間軸では普通に戦えばただの主婦であるのはが、スバルに敵う道理などない。

しかし、なのはは見知らぬリリイという少女を救うべく立ちはだかる。

だが一触即発を打ち破ったのは横槍だった。

「なのはさん、こっちっ！」

「トーマくん！？ う、うんっ！」

横から援護にやってきたトーマによって、なのはとリリイは事なきを得る。

スバルは三人を追いかけようとする。走ればすぐ間に合うだろう。

しかし、そんな暇はなかった。

「……ヒドウン！　こんな時につ！」

ヒドウンが現れたのだから。

~~~~~

なのはとトーマは謎の少女リリイを伴って逃げていた。

「ス、スウちゃんどうしちゃったんだろう！？　それよりその子は！？」

「分かんない、スバルがあんなひどい事するなんて思いたくない……でもこの子も助けないと！」

「……ええ、そうですねえ！」

スバルが何故リリイを追うのか分らない。

しかし、それでもなのはもトーマも、何故か追われるリリイを救おうと必死だった。

だが災害はここまでやってくる。

「ヒ、ヒドウン！」

人型のヒドウンが現れた。

民間人のなのはやC級魔術師のトーマにとっては十分脅威だ。

「きゃあっ！」

「くそつ。逃げるしか……」

しかし逃げる必要など、なかった。

「風は空に、星は天に……輝く光はこの腕に！ 不屈の心はこの胸に！ デイバインバスター（物理）！」

ヒドウンは殴り飛ばされたからである。

しかしそれはスバルのものではない。

もう一人、この魔法を受け継ぐ少女が居るからだ。

「危なかったわね。でももう大丈夫」

その少女は第二生長期を超えていた。

だがそれも魔法なのだ。少女が背伸びをして大人ぶる魔法。

「ヴィ、ヴィヴィ！？」

「違うわ！ 私はあなたの義妹などではない……」

まぎれもなく彼女は、ヴィヴィオ・ハラウンは魔法少女だ。

「今の私はリリカル ヴィヴィオ！」

~~~~~

スバルはかつての仲間と対峙していた。

「ヴィヴィ……」

スバルはヴィヴィオと長い付き合いだ。

具体的にヴィヴィオがドクター・スカリエッティ（通称スカさん）の元から自分の意思で異世界調査部隊第六課にスパイに入ってきた時からの付き合いだ。

「ヒドウンはあっちよ。仕留めたいならそっちが先じゃないんですか？」

「ヴィヴィ……貴方は……」

「呑みこみが悪いわね。手を貸してあげるって言うてんのよ」

ああ、ヴィヴィオは猫かぶりのナマイキな娘だった。

それがリリちゃStrikersで語られた失われた記憶。語られるはずのない物語。

「……ああ、行くよ。夢と希望のディバインバスターだっ！」

「ええっ！」

語られるはずのない魔法。
今こそ新たに紡ごう。

「風は空に」

「星は天に」

「輝く光はこの腕に！ 不屈の心はこの胸に！」

「一擊必倒！」

「一閃必中！」

「ツヴァイ・ディバインスタアアアアアアアアアアアアアア
アアア!!!!!!!!!!!!」

~~~~~

——だが効かない。

「そんな……スウちゃんとヴィヴィのツヴァイ・ディバインバスターでも倒せないヒドゥンなんて!」

「仕方ありません。あの人達だけでは荷が重すぎました」

「ひどいよ！　こんなのつてないよっ！」

『諦めたらそれまでです。でも貴方なら運命を変えられる』

「え？」

『避けようのない滅びも、嘆きも、すべて貴方が覆せばいい。そのための力が貴方には備わっているんだから』

「本当……なのか？ 僕にこんなふざけた結末を変える力があるのか？」

『もちろんです。だから私とエンゲージ誓約して下さい。黒騎士になってよ！』

――この世界に管理局の白いなのはさ悪魔は居ない。

されどその不屈の魂を受け継ぐ者達は現れる。

~~~~~

リリちゃ F o r c e V i v i d

~~~~~

黒騎士と聖王が交差する時、物語は始まらない。  
ええ、始まりませんとも。  
このSSは嘘予告なんです。

## （後書き）

うん、4月1日用のネタとして書いてたら日付を越してしまったんだ。

本編は多分書きません。

書いてる本人も飛ばし飛ばしでやってますが、こんな話をちょっとだけ妄想しましたという。

「とらハ」アフターとしてのなのはStSの二次創作SSを書いてたんです。

それが「リリチャStrikers」なのです。  
ですが色々あって頓挫したのです。

その際、ヘイトを撒き散らして迷惑をかけたのです。  
その未練をちよつとだけ晴らしたかったのです。

トーマとヴィヴィオを義兄妹にしたかったのです。

リリイを心配するなのちゃんさんが見たかったのです。  
ツヴァイ・デイバインバスターをやりたかったのです。

ただ、それだけです。

面倒なことは結構飛ばしてます。

というか、なのは一期の監督が作った某アニメのパロディです。

書いてて救われました。

ここまで読んで下さった酔狂な方、ごめんなさい、ありがとうございます。

- -でもトーマとヴィヴィオが義兄妹だと萌えると思った。その時の気持ちは本当だと思ったから。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1335s/>

---

リリちゃForce vivid

2011年4月2日01時30分発行